



©Heinz Wernecke

稲森安太己

Yasutaki Inamori

1978年東京生まれ。東京学芸大学にて作曲を山内雅弘に、ケルン音楽舞踊大学にて作曲をミハエル・パイル、ヨハネス・シェルホルンに師事。2009年東京学芸大学大学院修了、11年ケルン音楽舞踊大学コンツェルトエグザメン課程修了(器楽作曲)、13年同大学大学院修了(電子音楽作曲)。作品は西ドイツ放送交響楽団、ギェルツェニヒ管弦楽団、ブリュッセル・フィルハーモニー管弦楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団などの演奏団体によってドイツ、イタリア、アメリカ、ベルギー、日本ほかで演奏されている。07年日本音楽コンクール第1位、11年ベルント・アロイス・ツィンマーマン奨学金賞、19年芥川也寸志サントリー作曲賞ほか。洗足学園音楽大学非常勤講師。

■ 第29回 芥川也寸志サントリー作曲賞受賞記念サントリー芸術財団委嘱作品

『ヒュポムネーマタ』

ピアノとオーケストラのための (2020~21)

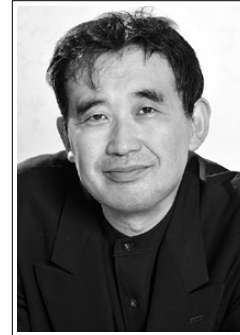
●プログラム・ノート

ピアノの独奏を伴う管弦楽曲を書きみたいと長年想い続けていた。作曲するだけならば、いつでも作曲すればよいが、実演の機会を考えると現実的ではないからと心が決まらず、40歳を過ぎるまで協奏的作品を書かずにいた。このたび敬愛する椎野伸一先生がピアノを引き受けてくださって、私の最初の協奏的作品が実現した。

書いてみたいと強く願いながらも書く機会を見つけられずに来た年月に、私の中で独奏楽器の役割はどんどん重くなっていった。『ヒュポムネーマタ』では、通常の協奏曲に比べて長い時間、ピアニストが弾き始めない。ピアノが入るまでに管弦楽が展開し、音楽は散乱していく。錯綜した合奏の響きを制してピアノは何を語り始めるだろう。雄弁に語るよりもピアノの音色そのものの美しさを管弦楽の重厚な響きと対比して際立たせながら味わいたい。ピアノは最初、技巧に走ることなく、丁寧なレガートやアーティキュレーションを通して管弦楽と対話していく。そして管弦楽と共に共同体としての立場を確立して高揚していく音楽である。

「ヒュポムネーマタ」とは「覚え書き」とか「注釈」、「考察」というほどの意味のギリシャ語由来の言葉である(単数形はヒュポムネマ)。

Pf Solo - 2 Fl / Picc / 2 Ob / E-Hrn / 2 Cl / Bs-Cl / 3 Fg (C-Fg) - 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Tub - Timp - 3 Perc (I=Guero / Bass Drum / Congas / Vib II=Temple Blocks / Tom-Toms / Mar III=Wood Blocks / Snare Drum) - Hrp - Pf - Strings (12-10-8-6-4)



©山之上雅信

杉山洋一

Yoichi Sugiyama

1969年12月19日東京都新宿区生まれ。桐朋学園大学作曲専攻卒業。作曲家として、ミラノ・ムジカ、ヴェネツィア・ピエンナーレをはじめ、国内外より多くの委嘱を受ける。代表作として、チベット民謡による『馬』、女声と室内楽のための『杜甫二首』、ブリアート族シャーマンの旋律に基づく三味線と弦楽合奏のための『歩み』、十七絃のための『鶴』がある。作曲家として、「東京現音計画#01~イタリア特集」で第13回佐治敬三賞、第2回一柳慧コンテンポラリー賞受賞。指揮者として、第68回芸術選奨文部科学省大臣新人賞受賞。2010年サンマリノ共和国聖アガタ騎士勲章受勲。ミラノ市立クラウドイオ・アバド音楽院教授。

■ 第31回 芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『自画像』

オーケストラのための (2020)

初演 2020年8月30日 サントリーホール 大ホール
サントリーホール サマーフェスティバル 2020
ザ・プロデューサー・シリーズ 一柳 慧がひらく~2020 東京アヴァンギャルド宣言~
オーケストラ スペース XXI-2
鈴木優人(指揮)、東京フィルハーモニー交響楽団
委嘱 サントリーホール

●プログラム・ノート

原題「アウトリット(Autoritratto)」は、伊語の「自動抽出」より転じ「自画像」の意。『自画像』は、自分が生まれた1969年から2020年3月までの半世紀にわたり、世界各国の戦争紛争地域の国歌や州歌を、時間軸に沿って並置したもの。曲頭のカバニーリエス『皇帝の戦争(バターリヤ第1番)』は、初演を指揮された鈴木優人さんへのオマージュで、愛聴してきた幼少の無邪気な回想。曲尾の旋律はイタリア軍の弔礼ラッパ。昨年3月イタリアでは陸軍のトラックが柩を各地の火葬場、墓地に運搬する際、墓地をあずかる市長がこの旋律で隊列を出迎えた。

ベルリンの壁とソビエト連邦の崩壊、9.11テロ攻撃では、束ねたチューブラーベルを鳴らし、それ以外打楽器は一年毎の時間軸を規則的に打つ。第1ヴァイオリンがアフリカ、コントラバスが中米という具合に、日本の世界地図に沿って各国の国歌が割り振られている。以前からオーケストラは世界のように感じていて、この機会に生きてきた半世紀を顧みたいと思った。しかし作曲はコロナ禍第1波がヨーロッパを呑み込むところで止まっていて、マリやミャンマーの軍事クーデターも、再燃したナゴルノ・カラバフ紛争や激化したガザの空爆も、タイや香港の民主化デモも、長引くコロナ禍も、何も知り得なかった当時の自分は思いがけず遠く、無邪気にすら見える。昨年は弦楽器群を削減した「ソーシャル・ディスタンス版」で初演したが、今回の演奏はオリジナル版による。

3 Fl / 3 Ob / 3 Cl / 3 Fg - 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Tub - 3 Perc (3 Bass Drums / 3 Anvils / 3 Big Metal Sheets / 3 Sets of Suspended 4 Tubular Bells / 3 Church Bells or 3 Tubular Bells) - Strings (14-12-10-8-6)



原島拓也
Takuya Harashima

1993年10月14日東京都奥多摩町生まれ。上野学園大学短期学部卒業、京都造形芸術大学卒業、桐朋学園大学研究生修了。第33回現音作曲新人賞入選、第9回JFC作曲賞入選、第89回日本音楽コンクール作曲部門第3位。作曲を金子仁美、山根明季子、山内雅弘、福士則夫、琵琶を水藤桜子(錦びわ宗家三代目)に師事。邦絃楽器のための室内楽作品や、月琴(明清楽)を取り入れたモノドラマ作品など、汎アジアの芸術文化の研究と、「今」の音楽につなぐ創作を、作曲家と演奏家の2つの領域から展開している。

■ 第31回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『寄せ木ファッション』

琵琶とオーケストラのための (2020)

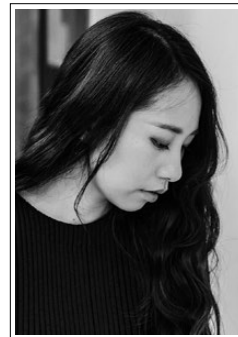
初演 2020年11月19日 NHK放送センター 505スタジオ
第89回日本音楽コンクール 作曲部門 本選入賞作品演奏
原島拓也(琵琶)、三ツ橋敏子(指揮)、東京フィルハーモニー交響楽団

●プログラム・ノート

色合いの異なる様々な木材を組み合わせて、模様を描く日本の伝統工芸「寄木細工」の、世界観に寄り添いながら、不可視な「音」本来の柔軟性によって、淡々と提示されながらも変容していく模様の音像を、聴き手自身の感覚の中でのみ纏うことのできる「架空の服」と考え、キャットウォーク(あるいは花道)の上で、モデルが流行を着飾って歩くファッションショーのような音楽を試みて描いた。本作はそれぞれ異なる質感とコンセプトを持つ4つのセクションと、21種類の日本の伝統文様をイメージした持続的音像を伴って音楽が進行していく。作品全体を支配する霊妙なテクスチャは雅楽の青海波からインスピレーションを受けて描いた。琵琶協奏曲とも言えるが、ハイカラとバンカラがアンチテーゼなく程よく共存した音楽というのが本来の意図である。古風であり斬新でありたい想いで作曲した和洋混成オーケストラ作品である。

およそ12分間の流行に、あなたはどのようなファッションを視て纏うのでしょうか。

Biwa Solo - Fl / Picc / A-Fl / Ob / E-Hrn / Es-Cl / Cl / Bs-Cl / Fg / C-Fg - 4 Hrn / 2 Trp / 2 Trb / Tub - 4 Perc (I=2 Timp / Sleigh Bells / Shime-Daiko II=Mar / 3 Japanese Gongs III=Vib / Hyōshigi / Sasara IV=Antique Cym / 3 Mokyugyo) - Hrp - Cel - Strings (14-12-10-8-6)



桑原ゆう
Yu Kuwabara

1984年12月7日千葉県千葉市生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業、同大学院音楽研究科修了。国立劇場、神奈川県立音楽堂、静岡音楽館AOI、横浜みなとみらいホール、箕面市立メイプルホール、トランジット現代音楽祭(ベルギー)、I & I Foundation (スイス) など、国内外で委嘱を受け、ダラムシュタット国際現代音楽夏期講習、ルツェルン音楽祭、ミラノ国際博覧会など、世界各地の音楽祭や企画で作品が取り上げられている。声明、神楽、民俗儀礼などの取材を重ね、日本の音と言葉を源流から探り、文化の古今と東西をつなぐことを軸に創作を展開。淡座メンバー。洗足学園音楽大学非常勤講師。

<https://3shimai.com/yu/>

■ 第31回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『タイム・アビス』

17人の奏者による2群のアンサンブルのための (2019~20)

初演 2020年3月1日
アルベルト・シュヴァイツァー・スクール・オフエンバッハ(ドイツ、オフエンバッハ・アム・マイン)
cresc...現代音楽ビエンナーレ「クラッシュコース ヒューマン__マシン」
エンノ・ボッベ(指揮)、アンサンブル・モデルン
委嘱 インターナショナル・アンサンブル・モデルン・アカデミー

●プログラム・ノート

近年、形式をいかに見出すかに興味がある。能の音楽の身体性、声明作品を書き思考する法要の形などをふまえ、時間とそれに伴う空間とを構築する方法を模索している。

『タイム・アビス』は、同時に、しかし個々に円環をなす三つの時間フィールド「入れ子の時間」「ねじれの時間」「傾斜する時間」のあいだを振幅し、形式を見出そうとした作品である。各時間フィールドは、奏者の時間感覚を揺さぶるような、テンポとリズムの仕掛けにより定義づけられる。あるテンポからその二倍の遅さへ数小節で減速するリタルダンドの反復で形成する「入れ子の時間」。拍子と小節内の重心が常に変化する「ねじれの時間」。「傾斜する時間」では四分音符=20のテンポを指定し、且つ、拍を分割した指揮を禁じる。巨大な一拍のどこで発音するか、奏者はいつもに増して緊張を強いられる。

cresc...現代音楽ビエンナーレのその年のテーマ「HUMAN__MACHINE」を踏まえ、本作品は人間の内的時間を疑うことに注目した。全体の時間を^{つかさど}る指揮者にとってはコンチェルト的な作品ともいえるかもしれない。

編成は二群のアンサンブルを想定し、ステージ下手にI班、上手にチューニングを四分音下げたII班が位置する。二群にした意図を十分に形にできたか、課題が残る。が、2019年7月に初めての個展を終え、第二フェーズに入ったことを感じながらの作曲で、最初期に書いていたようなカオティックな音響が再び現れたのに不思議な感覚を覚えた。

Fl (Bs-Fl) / Ob / Cl (Bs-Cl) / Fg (C-Fg) - Hrn / Trp / Trb - 2 Perc (I=Prepared Mar / Chinese Cym / Wood Block / Timp II=Prepared Vib / Chinese Cym / Wood Block / Timp / Rin) - Pf - Synthesizer (Harpichord Sound) - Vn I / Vn II / Va / Vc I / Vc II / DB